

---

鳥山まこと(1992~)『時の家』文藝春秋 2026年3月号

---

●時を重ねた家が、住んだ人々の記憶を思い出す物語

p.249 彼は順を追うようにその一つひとつを見つめていった。そしてこの場に住んでいたであろう誰かの淡い影のようなものを感じ、まだ残っているかのような彼らの気配を見ていた。

・この家は特別な家「時の幹」

p.256 緑はこの空間に初めて立った時無機質な高層マンションとは明らかに異なる柔らかさを感じた。わかりやすい和の装飾はほとんどなく素朴な質感なのに、なぜか帰ってきたような感覚が湧き上がる。

➡家というより、“里山”といった印象を受けた。人の自然の淡いにあって、人が丁寧に手入れをし、住むことで愛着を増す生活圏、環境。現代では、失われつつある家かもしれない。

---

●家に住んだ人々

〈青年〉

家をデッサンし、その過程でさまざまな記憶が呼び起される。

〈藪さん〉

家の設計者。多くの職人とともに、さまざまな思いを込めて家を建てた。

〈二代目 緑さん〉

家で塾を始める。震災で失った友人や震災で母親を失った塾に通う少年のエピソードが描かれる。

〈三代目 圭さん〉

母親が離婚している。夫の脩さんと違和のある夫婦関係がある。

➡別々の時間を過ごしているにもかかわらず、その記憶は折り重なって呼び起されている。

青年が小屋根に入り『軸組図』を見つけたところでは、以下のように描かれている。

p.295 図面には枠の右隅に、スケッチには縁に走り書きでその全てに描かれた日付が記されていた。日付は緑にとっては二十一年前のもので、圭さんにとっては三十一年前のもの、青年にとっては四十年前のものだった。三人はそれぞれに目に入れながら、そこに異なる年月の長さを浮かべていた。

---

●記憶の呼び起し

傷跡や取手など、家の至るところにある細部から、傷跡をなぞることや、青年のデッサンなどをきっかけとして、折り重なった記憶が呼び起される。

p.259 (略)緑は一息ついた。そして籐巻を一周ぐると手で触れてまわった。マルタの唾液でしつとりとする籐巻にはところどころ損傷が見え、一箇所深く歯が入ったであろう傷跡を見つけた。その傷をなぞった。指の先で深さや幅を確かめながら、ここで全部を一人でやってゆくのだということが強い実感として湧いてきた。それは一本の自由であり、太い覚悟だった。緑が細い指でなぞった部分を、青年は鉛筆で描き上げてゆく。

➡ふつう、私たちは記憶は自分の頭の中にあると思っているが、この小説が描くのは、記憶は物のほうにこそある、ということ。

---

### ●『時の家』が提示する【時間】と【物】

#### 【時間】

緑は震災で亡くなった友人を思い出す過程で、次のようにいう。

p.259 彼女の時間というものが今もまだ続いている軽さがあった(略)途絶えた時間というものを据えることができなかった

➡これは緑のエピソードだが、小説全体を通して、別々であるはずの時空間を、地続きなものとして描き出している印象を受ける。

#### 【物】

キッチンの天板のくだけり

p.259 藪さんが魚を捌くのによく使い、脩さんが長いパンを切るのによく使った大判のチークの天板は、緑にとってはマルつけの舞台であった。

天井

p.282 圭さんがここに越してきた時から変わらず感じてきたのは広さだった。リビングのおおらかに二人を包み込んでくれる広さにこそ心地よさを覚え、身体を馴染ませることができていた。しかし脩さんはそれを狭さと口にした。(略)圭さんは脩さんが真逆の感覚を抱いていることの手触りの悪さを思い出していた。

➡物はさまざまな記憶を呼び起すが、それらは個々にばらばらだということ。

それぞれの個の尊さを重んじれば重んじるほど、個と個のあいだには不確かさが増していく。

⇒ふつう私たちは、異なる時間を生きる者とは相容れず、物もまた一義的に定まったものとして世界を受け取っている。…①

とはいえ、その前提はときに綻びる。『時の家』が描くのは、その綻びが例外ではなく、むしろ全面にひろがった世界だ。そこでは、異なる時空間が別々でありながら常に重なり合い、一方で、同じ物が呼び起こす記憶は、人ごとに異なっている。…②

この①と②を図にして整理してみる。

	①近代的な世界	②『時の家』が提示する世界
時間	異なる時間を生きる者とは相容れない	異なる時空間が別々でありながら常に重なり合う
物	物もまた一義的に定まる	同じ物でも呼び起こす記憶は、人ごとに異なる
特徴	➡直接的 自らが直接触れ得たものに限る	➡間接的 自らが触れ得ないものへと広がる

この小説が教えるのは、間接的でありながら、確かなことがことが伝わっていくという、間接的であることの可能性ではないか。

緑が震災を振り返るところで、次のようにいう。

p.286 揺れの中心にいた人たちの心を本当に知ることはできない

一方で、塾で教えていた少年は、震災で亡くした実の母親のことを緑に次のように話す。

p.288 でも。地震のことも、自分を産んだ実の母親のことも、どちらも覚えてないです。地震が起きた時も、母親が生きていた時も、自分は紛れもなくいたはずなのに何にも思い出せへんくて」もちろん、当時幼すぎたことがこの感慨のもとだが、しかし直接的なことだけが確かならば、実の母親への思いは生じないはずだった。

つまり、そこから隔てられているということが、むしろ思い出の連なりにつながるといえるのではないか。そしてこの間接性は、文学的な営為をも教えるものではなかったか。

### ●文学的な営為

記憶の風化という言い方には、直接経験した者だけが語る資格があり、当事者以外の者がそれを語ることの困難さという意味が含まれている。つまり、直接的なことに価値が優位に置かれ、間接的なことは劣位に置かれる。

(しかし、たとえば光州事件を取材した作品『少年が来る』のハン・ガンは、直接事件に居合わせたわけではないが、事件の全容をありありとよみがえらせている。)

もし、直接の経験だけに限られるのなら、青年が家に見出すのは、壁の傷跡、窪みだけだっただろう。けれど、それらの痕跡は、かつてその痕跡をめぐって繰り返された人の営みを想起させる。物に触発され、あるいは物からいま目に見えている以上のものを感じ取る。

家が解体され、誰もいなくなった箱になったくんだり、緑の思考は次のようにいう。

p.286 少年が目留めていたあの過去問題集の中の短い文章でできた証明問題。交わることのない二直線の上を、それぞれがゆっくりと歩いてゆく。自分も、少年も、そして彼女も。直行する直線と交わるその一点を振り返り、歩くたびに足元の線もまた向きや傾きを変え続けてゆく。

だから、思い出すというのはもしかすると。

この「もしかすると」のあとが、思い出すということの可能性であると感じる。おそらく、通常、私たちが思い出すというときに考えられているものとは、別の可能性が賭けられている。

---

## ●おまけ

石牟礼道子の方法について

(古賀徹「論考 語ることの真理」『追悼 石牟礼道子』所収 河出書房新社)

渡辺京二は、講談社文庫版の『苦海浄土』に収録された「石牟礼道子の世界」において、「ゆき女きき書」などの本書の精髓部分が取材対象の患者の発言にほとんど基づかないこと、いわんや患者の言葉を作者なりに文章化し再構成した「聞き書き」ですらないことを明らかにしている。石牟礼は患者が実際に語ってもいないことを、患者その人の語りとして、その人がもっとも言いたかったこととして表現しているというのである。

とはいえ『苦海浄土』においても、それと並行して取材がなされていた『西南役伝説』においても、原資料や地を這う取材に基づく徹底した実証的手続きを基本的に石牟礼は取っている。ところが話がピークを迎え、当事者の「証言」ともいえる核心的部分に達すると、突然叙述は実証的基盤から離脱し、作者の想像力という船に乗って独自の旅を始めてしまうのだ。エビデンスがいまや問題となっている。「事実」かどうかだけが問題となっている。核心部分において石牟礼はそれを決定的に欠いている。

何より重いのは、その叙述が文学的創作を含むことを『苦海浄土』のうちで石牟礼がまったく明記していないということである。文献や取材に基づく実証的部分から想像的部分へと叙述はシームレスに移行する。それどころかこの書は、想像か事実をあえて曖昧にしつつ書き進んでいくことをその叙述の方法論としているかのようなのだ。

草がぼうぼう生えとる中をずうっと通って、えらいぼつんと離れた原っぱにきてしもうたな、と  
思うて見ると、箱の置いてあるような建物のしんとして、草の中にあつた。なんやらさびしか所や  
つたばい。建物にや窓のついとる。ここは何じゃろかいとおもうて窓に目ばひつつけて見よつた  
ら、人間ばマナイタの上に乗せて手術のありよる。はらわたばあつちなおし、こつちなおしよら  
す。(略)臭うして心の冷えびえして、生きとることと死んどることのけじめの所ば、出たり入つた  
りしとる気色じゃつた。腹わたの赤やら青やらが遠かどこにあつて、なんやらなつかしかごたる  
妙な気持ちじゃつた。

石牟礼は、一切の注釈なしに、解剖を見た自分の経験を坂上ゆきに移行させ、自身の経験を他者の主語にて〈かたり〉直しているかのようなのだ。